



# 百人一步通信

～「一人の百歩より百人の一步」の社会を作ろう～

【発行】今井和夫とともに歩む「百人一步の会」  
【代表】今井和夫（しゅうりょう 宍粟市議会 ししし 宍志の会所属）  
〒 671-3211 しゅうりょう 兵庫県宍粟市千種町岩野辺 1065  
☎ 090-9610-2511  
✉ hyakunin-ippo@imaifarm.jp

第4号 2018年（平成30年）5月

## こんにちは、市議会議員の今井和夫です

田んぼの水面が鏡のように映す新緑の山と青い空。苗が大きくなるまでのしばらくの絶景が続きます。

約一年ぶりになりましたこの通信。昨年には熱い反響をたくさんいただき、本当にありがとうございました。

そして、市議会議員にならせていただき早一年。『**皆さんの所に伺います。発言します。通信を出します。**』これは私の立候補の時の公約でしたが、大変遅くなり申し訳ありませんでした。

## 議員の暮らして???

この一年で本棚に並んだ書類は1mを優に越します。そのうちのどれだけを読みこなせたでしょう。一通り目を通すだけで精一杯のものがほとんどです。

とにかく、この一年は、このように次々行政当局から出される資料を読んだり、また、委員会等の活動（私は今5つの委員会に所属しています）や、会派「宍志の会」での研修会をしたり、様々な行事やイベントに参加させていただいたり、また、地域の方からの相談活動もありました。

よく「議員って日々何をしてるの?」と言われる。私もそう思ってきました。だいたい市役所に登庁しなければならない日は月5～10日前後。あとは、いろんなところに出向いたり、家で調べ物、勉強しています。正直、時間はいくらあっても足りないです。

## 頑張って発信していきます

私は、この通信を通じて多くの市民の方と、私たちの暮らしについて考えていきたいと思っています。立候補の時にも言いましたが、**もう地方は地方だけの努力で良くなれる時代ではないと思います。** 税収も少なくなり地方交付税も減っていきます。そんな中、市の中でおカネの取り合いをしていても何も良くなっていかないように思います。

でも、**実は日本にはあるところには思いっきりおカネは貯まっています。これを『格差』と言うのですが、そのあたりを何とかしていかなければ、地方の暮らし、私たちの暮らしは良くなっていかないと**思っています。

大きな話になるようですが、市議会議員も政治家。住民に一番近い政治家です。身近なことも頑張らねばならないですが、市の中だけで考えても私たちの暮らしが良ならないのならば、**視野を広げ、国の動き・世界の流れを学び、そこから私たちはどう動けばいいのかを探るのも市議会議員の仕事ではないか**と理想としては思っています。（なかなかできていませんが・・・）

というのも、私たちの暮らしの課題はもう国政レベルのことがほとんどだからです。だから、そこを学び対策を考えることも、一番身近な政治家の役目だと私は思います。全国に市町村議会議員は約3万人。役割は大きいと思います。



そんな意味でも、まだまだ知らないことばかりですので、どうぞご指導お願いいたします。教えていただきながら、ともに明日の宍粟を、明日の日本を考え、行動していきましょう。

**ご意見・ご投稿、お待ちしております。**



波賀町飯見自治会の皆様が作られた「ライスおじさん」と「愛ちゃん」。「飯見米」づくり、地域活性化に、地域を挙げて頑張っておられます。

## 消防団の年末警戒をまわる

昨年末の恒例の消防団・年末警戒の時、若者の意見を聞ける良いチャンスと思い、千種町内だけですが全分団をまわらせていただきました。そこで出てきた意見を一部ですが書いてみたいと思います。

- スポーツや音楽施設が宍粟には少ない。
- 病院、特に小児科が欲しい。
- とにかくすべてが山崎中心。
- 北部に住むと特典があるようにできないか。（住宅補助、通勤費助成、固定資産税免除、etc）
- 市の住宅新築への助成（最大120万円補助）は、北部の者に山崎に出て家を建てるように勤めているようなもの。実家を二世帯住宅にするとか、実家の近くに家を建てる等に限るべき
- 子育て環境や進学などを確立すれば残る若者もいるのではないか。他町に比べて子育てには良いところだと思う。
- 仮想通貨で地域通貨を作ろうとしている所もある。そんな先進的な取り組みをしてみてもいい。
- 「意識」の問題も大きいのではないか。「自分の育ったところを守りたい」それがなくていくら仕事があっても出ていくのでは。
- コメがもっと高く売れば生活できるのだが・・・。
- 山崎インターのすぐ近くに『道の駅しろう』を作ればいい。それを宍粟市の観光ステーションとして、宍粟中のモノを置く。それがおもてなしだ。
- 市の職員は市内に住むべき。

等、いろんな意見をいただきました。とにかく痛感したことは、若者の意見を聞けていないなあということです。彼らの親の世代の意見を聞く機会は結構あるが、この世代は聞けていない。**「若者の定着が市の一番の課題」と言うのなら、まず当事者の意見を聞くべき**と思いました。

## ブログもぞいてみてください

「**いまい農場**」のブログに、議員活動や地域の様子、また、ニワトリたちも出ています。週一回の更新に努めますので、ぜひ見に来てください。



## 宍粟市の農村地域が生き残る道 若者が農林業で生活できるような 国による補償を!!

私の考える農業・地域政策 (その1)

私は平成元年に新規就農し、自然養鶏を生業にやってまいりました。だからこそ思います。「今の日本の農政では地方はつぶれてしまう」と。私が考える農政について数回にわたり書いてみたいと思います。

### 1. 田んぼが荒れてしまえば、もう人が住めないところになる

今、田植えの真っ最中の季節ですね。ゴールデンウィークや休日を利用して多くの方が田んぼをされていることでしょう。本当にご苦労様です。皆様、農家お一人お一人のご苦労がこの美しい宍粟を作っている一番のおおもとです。

でも、皆さん思われていることでしょう。「自分ができなくなったらどうなるのだろう〜」って。

想像してみてください。皆さんの家のまわりにある田んぼがすべて荒れ果てた風景を。草ぼうぼう、木が生えヤブになり、キツネや鹿が昼間からウロウロしている。そうなるともう人は住めません。他のどんな仕事もできません。観光ももちろん成り立ちません。そうです、この宍粟の大部分は田んぼが維持されてはじめて成り立つところなのではないでしょうか。

### 2. 日本中の田んぼは維持されなければならない

『国としての食料の自給』これが宍粟の農村地域がこの先もずっと続いていくかどうかのカギだと思います。すべてはこれにかかっていると言っても言い過ぎではないと思います。

宍粟の農村地域は大部分が「中山間地域」と言われるところ。それは日本全国の農地の約4割を占めます。大規模化できない「効率の悪い」と言われるこの4割の農地を放棄すれば、日本人の食料は自給できません。「足らずは外国から輸入」ということになります。

それでいいと日本人が思うならば、もう中山間地域はお手上げです。あとは林業がありますが、それだけでは非常にきびしいです。ごく一部の特産品のあるところ以外は、いずれ廃墟となるしかありません。

しかし、今の日本はまさにその方向を向いているように思えてなりません。「もう、宍粟北部は消えていくところだから…」そんなことを言われる方もおられます。

でも、本当にそれでいいのでしょうか。

「食料を自給する」それは、国の経営の一番の根幹だと私は思うのです。まして、日本という国は、気候は温暖で雨はよく降り土は肥え、おいしい食べ物がいっぱいできる、世界的にもとても農業に向いている国です。(今や日本の食を求めて世界からたくさんの方がやって来ています)

世界の人口は今からどんどんと増え、地球温暖化で気候は不安定になり、おカネさえ出せばいつでも食料を輸入できる状況はいつまでも続きません。また、そのおカネもいつまでもあると思うのは間違いです。

また、輸入食品は遠いところから運んで来るので、虫が湧かないように、腐らないように、様々な薬剤処理がされています。これが今の日本人の病気になる大きな一因と言われています。

そして、なにより、国としての独立、安全保障が食料を輸入に頼ってはいけません。

先日、トランプ大統領が言いました「鉄とアルミを作れない国は国ではない」と。その前にブッシュ大統領が言ってます「食料を自給できない国を想像できるか。それは国ではない」と…。

そう考えるならば、日本中、荒らしてもいい田んぼは一枚もないはずなんです。



この美しい田園風景を守る仕組みを作ることが、今を生きる者の勤めだと思います。(千種町岩野辺)

### 3. 若者が農業で生活できる道をつくるしかない

では、その田んぼを維持していくのはどうすればいいか。

今、田んぼを作られている方はほとんどが年金をもらわれている高齢者、あるいは、兼業で他に仕事のある方でしょう。でも、その兼業となる仕事もどんどんなくなり、若者は都会へ出て行っています。高齢者もいつかは耕作できなくなるのも現実です。

今、あちこちで模索されている「集落営農」。これも実態は、元気な年金生活者がいることが前提のものです。その方々がいなくなれば成り立ちません。

では、どうするのか。それは若者が農業を、それも田んぼを仕事にできる道を作る以外にないのではないのでしょうか。

今の地方の常識の一つが「田んぼでは食えない」です。現状はそうでしょう。

今、地方の子どもたちの将来の仕事として「農業」を考える子はほとんどありません。これが日本の常識なのですが、これって実は異常な事態なのではないでしょうか。農業地帯に住みながら、子どもの将来の仕事に「農業」が出てこない。これは「滅びの始まり」のように私には思えます。

「若者が田んぼを仕事にしても安心して生活していける」そんな道を作っていくこと、これが宍粟のような農村地域、中山間地域がずっと続いていく絶対条件だと思います。

そして、それは日本という国が真っ当な国であり続ける道だと思います。

では、どうすれば若者が田んぼを仕事にできるのか。… 本当はできるのです。それは、例えば、中山間地域の田んぼ 10a あたり 10 万円の補償を出すと、農家を半公務員にすると、日本全国で 3 兆円くらいあればできることなのです。そして、実は欧米先進国ではどこもやっていることなのです。

… 続きは次号に書かせていただきます。

(7 月中旬頃発行予定です)